



の中の

子どもたち

## 第13回 旅立ちの島唄～十五の春～

—堪えて歌うんだよ—

川崎 二三彦

### 南大東島

「沖縄本島から東へ 360 km。南大東島には高校がない。子どもたちはみな十五の春に島を旅立つ」

予告編のこんなフレーズに誘われて観た南大東島が舞台のこの映画、タイトルも作品のテーマをそのまま表したものだし、特別何か趣向を凝らしているわけでもない。けれど、素直に観ていけばジーンとくる、そんな映画だった。

\*

ところで、南大東島は「台風が一番最初に通ることが多い有人島」らしい。そういえば、子どもの頃から天気予報でよく耳にしていた記憶があるが、考えてみるとそれがどこにあるのか、どんな島なのかはほとんど知らなかった。



そこで少し調べてみると、島の面積は約 30km<sup>2</sup>、最高標高 75m の平らな島で、島全体が「南大東島村」なのだという。1900 年に八丈島から 23 人の開拓団が上陸してサトウキビ栽培を始めており、以来、今日まで百年以上、島の基幹産業となっている。映画の中でも、主人公の中学 3 年生優奈（三吉彩花）の家族はサトウキビの栽培農家という設定で、TPP 参加に激しく反対す

る農家の話し合いの場面もあった。

2013 年 3 月 1 日現在の人口は、Wikipedia によると推定 1435 人。高校受験の際の面接で、「島のみんなが知り合いで、一つの家族みたい」と優奈が話すのだけれど、おそらくそのとおりだろう。8 km 離れた北大東島との「南北両大東村親善競技大会」は、「両村のスポーツ振興と親善交流を深める目的で両村交互に球技及び相撲大会を開催」と村の公式ホームページで説明されていて、映画でそのシーンを見る限り、子どもから大人までが競技に参加する一大イベント。おそらくは、たくさん島民がエキストラで出演し、年中行事と同じように演じたのだろうが、なるほど、それぞれの島民が一つの家族のようになって応援している姿が印象的だった。

### 家族

さて、物語はこうした島の現状を背景に展開する。映画が始まるとほどなく、優奈の母（大竹しのぶ）が島に住んでいないことがわかる。どうやらそれは、兄や姉が沖縄本島で高校生活を送る際、付き添って一緒に生活するために島を離れ、そのまま戻ってこなかったことによるらしい。形は少し違うけれど、私も単身赴任して早くも 7 年目。家族や夫婦が同じ空間で過ごすことはやはり必要だと感じたので、けんかするためであっても、任地と自宅を往復するよう心がけている。ただし、島と沖縄本島は船で 13 時間。加えてその船も毎日運行されてはいないのだから、行き来もままなるまい。本作の母は、もともと島の出身ではなく、那覇での生活を続けるうちにいつのまにか夫婦の間に溝ができ、帰島するチャ



ンスを失ったのであろう。十分あり得る話だなと、私は思った。

こうして戻るべき人が戻らぬ代わりに、戻らなくてよい人、つまり結婚した優奈の姉が、子どもを連れてふいに戻ってくる。何があったのかはわからないけれど、これまた日本のどこにもある光景で、こうなると南大東島も例外ではないのである。

ただし、少し違うところもあった。

「長男の嫁が何年も家<sup>うち</sup>を空けっ放しにすると、世間に恰好つかないよ」

近所のよしみで、日頃から互いに食べ物をお裾分けするような濃い人間関係の中で生きているからこそその、親戚のおばちゃんの発言だ。

### アバヨーイ

ところで、南大東島には「ボロジノ娘」という少女民謡グループがあるという。そもそもこの映画も、ボロジノ娘の登場するドキュメンタリーに心を動かされたことが出発点だったらしい。彼女たちが中学を卒業し、島を離れる時に唄うのが、「アバヨーイ」。作詞・作曲は村役場職員。15歳にして島を離れる子どもたちが、原点を忘れず、夢と希望をもって旅立つ想いを綴ったもので、今では島の欠かせぬ別れの唄だという。だから、優奈が唄う「アバヨーイ」は、映画のクライマックスとなる。

ということはこの映画、シナリオこそオリジナルではあるけれど、そのほとんどは南大東島の生活を忠実に再現し、ロケに際しては全島を挙げて協力した作品なのである。事実、民謡教室

の新垣則夫先生も、素のままで登場する。

「この唄は泣いて歌ったら価値ないからさ、堪えて歌うんだよ」

優奈が唄と三線を習う場面で、新垣先生は穏やかな口調でこんなふうに注意していたけれど、私には、なぜかこのシーンが最も強く心に残った。この一言にこそ、島で生きるさまざまな思いが凝集されているように感じられたからだ。三吉彩花は短期間の猛特訓でこの唄を覚え、クライマックスでは、緊張の中にも涙を見せず、見事に唄い終えたのであった。

### イニシエーション

映画を見終わって、ふっと考えたことがある。現代の子どもたちの一体どれぐらいの者が、こんなふうに15歳を迎えるだろうかということだ。

高校受験の面接で、優奈は「この島が好き」と言いながら、入学後に一人残されることとなる父親（小林薫）のことをしきりに心配していた。旅立つ自分のことよりも、残される父のことを考える。島に高校がないという現実が、15歳の春を迎える彼らの通過儀礼となって、彼らを一回り大きくするのであろう。

かつて、長く京都府知事を務めた蜷川虎三は、「一五の春を泣かせない」という名言を吐いて高校全入を目指したが、一五の春は、泣かせてはならないし、泣いてもいけないのであった。

\* 2013 / 日本

\* 鑑賞データ 2013/05/18 チネチッタ

\* 公式 HP <http://www.bitters.co.jp/shimauta/>

\* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20875>

<これまでの連載>

- 第1回 [プレシャス](#)
- 第2回 [クロッシング](#)
- 第3回 [冬の小鳥](#)
- 第4回 [その街のこども](#)
- 第5回 [八目目の鱈](#)
- 第6回 [いのちの子ども](#)
- 第7回 [ラビット・ホール](#)
- 第8回 [サラの鱧](#)
- 第9回 [少年と自転車](#)
- 第10回 [オレンジと太陽](#)
- 第11回 [孤独なツバメたち](#)
- 第12回 [明日の空の向こうに](#)

\* 題名をクリックすると本文へジャンプします。